2015年4月26日中原教会メッセージ

聖書箇所：ダニエル書7:9-14

　　　　　　　　　**「年を経た方」と「人の子のような方」**

　本日の聖書の箇所は私の修士論文の対象とした「ダニエル書」7章の一部です。まずダニエル書とはどのような文書なのか概略ご説明いたします。ダニエル書は全体が12章ですが、1-6章までは物語部分と称せられ、ダニエルが王の夢を解き明かし、アッシリアの高官に取り立てられた話や、ダニエルの友人が、アッシリアの宮廷にあって、偶像礼拝を拒否したため、燃え盛る竈（かまど）に投げ込まれるのですが、神の力に依り、ゆうゆうと歩き回ることができた、というような物語が書かれています。7章からはガラッと変わり、この国に将来起こることを預言する内容になっています。それらは黙示と言い、終末的な出来事を述べています。この黙示に示されているイスラエルの苦難は、BC.2c前半のシリア支配下のイスラエルの状況を忠実に反映しています。このことから、7章以降はこの時期に書かれたのではないか、という説もあります。他方、1章と8-12章は旧約聖書での通常のようにヘブル語で書かれていますが、2-7章はシリアの言葉であるアラム語という言葉で書かれています。このことから、そもそもはすべてアラム語で書かれたものが一部ヘブル語に訳されたのではないか等、いろいろな説があります。アラム語はヘブル語の親戚の言葉であり、共通の単語も多数あります。イエス様は日常的にはアラム語を使ったのではないか、と言われています。新約聖書にもアラム語の表現がいくつか出てまいります。従って、このダニエル書7章は言葉の点からは6章までの物語と同様ですが内容的には8章以降の黙示の最初の章という形になっています。いわば、ダニエル書の前半と後半を繋ぐ役割を果している章であると言えます。

　7章以降の時代背景と想定される、BC2c前半の歴史的状況をもう少し詳しく見てみます。BC4cにギリシャに近いマケドニアからアレキサンダー大王が出てきて、ギリシャからインドの西側に到る広大な領域を征服しました。エジプトをも含みます。これがヘレニズム帝国であり、ギリシャ文明を世界に広げる役割を果しました。この文化はガンダーラ美術として中国経由日本にも伝わって来ています。奈良正倉院のガラス美術品などがそうです。このヘレニズム帝国はアレキサンダー大王の死後分裂し、イスラエルは、エジプトの支配下にはいります。エジプトは宗教的にはイスラエルの神信仰を許容いたしました。また政治的・軍事的にもイスラエルを抑圧するようなことはあまりありませんでした。しかし、BC2cに入りますとシリアが勢力をのばし、イスラエルをその支配下に納めます。BC175年にシリアではエピファネスと言われる王が即位しましたが、この王は、イスラエルをギリシャ・ローマ化をすることを強力に進めます。具体的にはエルサレムの神殿での祭儀や礼拝を禁止し、代わりにギリシャ・ローマの神ジュピターへの礼拝を強要することであり、聖書における律法による生活習慣をやめ、ギリシャ風の衣服、食物に切り替えることです。ユダヤ人にとって神殿での祭儀や、律法を遵守することは信仰の中心ですから強烈な抵抗を致します。ついにBC167年には武力蜂起となりました。また、エジプトとの戦争が続いておりエピファネスはその遠征の途上で病死することになります。これによりシリアの勢力も衰えたため、イスラエルの地はエジプト、シリアという２大強極の狭間で独立を得ることになります。これがBC1c半ばのローマによるイスラエルの占領まで続きます。約百年のイスラエル独立の時代です。今日のユダヤ教の原型が確立する時代です。ダニエル書7章以降の聖書箇所の時代背景はこのシリア王エピファネスのイスラエル抹殺、宗教的弾圧の時代です。ユダヤの敬虔な人々が多数、殉教しました。このようななかで、未来における神の到来に希望をつなぐ黙示文書が書かれたのです。新約聖書では黙示録がこの流れにある文書です。

　では本日の聖書箇所の内容に入りましょう。本日の聖書箇所に入る前のダニエル書7章では4つの王国の推移が獣の登場になぞらえて記述されています。かつてのバビロニア、アッシリア、ヘレニズム帝国などと推測されます。そして本日の聖書箇所に登場する王国はこの四王国につづく第五の王国ということになります。しかし、この王国はそれまでの王国とは異なり、神の支配の下にある永遠の王国です。新約聖書で、私たちの今の言葉で言えば「神の国」です。まず9節で「年を経た方」という方が記されています。この表現はアラム語直訳では「日の老いたる者」となり、口語訳聖書ではそのように訳されています。日が老いる、とは奇妙な表現であり、旧約聖書でもここだけの表現です。要すれば「老いた」という意味です。日本語の老人ということではなく、長い間生きて居る尊敬さるべき者、という事です。他方、ヘブル語で「永遠」ということばは「オーラーム」と言いますが「老いた」という意味もあります。古来から「エール・オーラーム」即ち「永遠の神」という言葉があり、この「年を経た方」、「日の老いたる者」はこの「永遠の神」からきた表現であることは間違いないところと考えられます。この「永遠の神」という表現は旧約聖書のいくつかの箇所にでてまいります。新約聖書でもローマ書16:25に登場します。お読みします。「私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現されて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方」とあります。いずれにしろ、この「年を経た方」は「永遠の神」のことであり、私たちの言う神様を指しています。9節、10節ではその神様がどういう方なのか描写しています。「雪のような白」と「燃える火」が特徴的表現です。ダニエル書の直前にエゼキエル書という文書がありますが、その1:26に「人間の姿に似たもの」という表現がでてきます。その描写は「火のようなもの」で「その方の回りには輝きがあった」とされています。エゼキエル書はダニエル書7章の数百年前に書かれたと推定されている文書です。また、BC3c頃の成立と推定されている第一エノク書『寝ずの番人の書』の14章にでてくる「聖にして大いなるおかた」に対する描写はここでの「年を経た方」に対する描写と極めて似ています。「聖にして大いなるおかた」とは神様の事ですから、この描写・表現の方から見ても「年を経た方」は神様の事を指している、と言えます。しかし、注意しなければならないことが一つあります。このように神様を具体的形をとった方、として表現するのは旧約の歴史の中では比較的新しいことに属する、「という点です。「創出レビ民申命記」のモーセ五書、イザヤ、エレミアの2大預言書では神様をこのように「雪のように白い衣」を着ているとか「火の流れがこの方の前から出ていた」というような目に見えるような表現はありません。もちろん十戒の第二戒「あなたは、何の形をも作るべからず」に抵触する可能性がある、と考えられていたからです。エゼキエル書1:26-28は「ようなもの」という婉曲的表現を用いながら、目に見える表現をしています。十戒との関係から言えば微妙なところです。エゼキエル書に端を発する黙示文書においてスタートした表現形式といえます。このことは、ローマ・カソリックやギリシャ正教の世界では、神様を白髪の老人で白い衣を着た方として描くことがなされることに繋がって行き、宗教改革においてプロテスタントは神様を具体的に描写することは一切やめました。ちなみに、イスラムはこれを今でも守っています。あの仏像破壊は「あなたは、何の形をも作るべからず」を単純に形式的に解釈した結果です。

　11節では第四の獣が神様によって滅ぼされるが第一から第三の獣は生きながらえらせられる、と言っています。第四の獣を今ユダヤ人を迫害しているエピファネスのシリアと解釈すれば、その支配・圧迫は神の国の到来により滅ぼされる、しかし、第三の獣の国は何らかの形で生きることを許される、ということです。エピファネス・シリアはユダヤ人にとって史上最悪の帝国であったのです。

　13節にはまた別の表現がでてきます。「人の子のような方」という表現です。「天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた」と言っています。そして、国の支配が委ねられ、諸外国はその方に仕えることになった、とされています。それは永遠の王国、即ち「神の国」です。「人の子」という表現は、イエス様が使われた表現ですので、その解釈をめぐっては二千年の議論の歴史があります。福音書で「人の子」は90の節に出てきますが、その例を一つ読みます。マタイ福音書9:1-8です。「イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰られた。 2 すると、人々が中風の人を床に寝かせたままで、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」と言われた。3 すると、律法学者たちは、心の中で、「この人は神をけがしている」と言った。4 イエスは彼らの心の思いを知って言われた。「なぜ、心の中で悪いことを考えているのか。 5 『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがやさしいか。6 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」こう言って、それから中風の人に、「起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい」と言われた。7 すると、彼は起きて家に帰った。8 群衆はそれを見て恐ろしくなり、こんな権威を人にお与えになった神をあがめた」。罪を赦す権威を持った方、として「人の子」が語られています。イエス様は自分を指して言われたのです。罪を赦すことができるのはユダヤ人の信仰に置いては神様だけですから、ここでは、イエス様は自らを神と同一の方、とおっしゃっていることになります。

旧約聖書でも「人の子」は多く使用されています。調べますと旧約聖書で170回でてきますがそのうち93回は「エゼキエル書です。エゼキエル書以外のところでの「人の子」は概して、「主の民」イスラエルを指している、と言って良いのですが、エゼキエル書では、終末の預言を語るエゼキエルに対する神様のよびかけのことばとして使用されています。ダニエル書は先ほど申し上げた通り、エゼキエル書の黙示の流れに在る書物ですから、「人の子のような方」という時の「人の子」は預言者を指しているのではないか、と推測することができます。シリア支配の時代のユダヤでは預言者といえばまず挙げられるのはモーセでありエリアです。エリアについては、イスラエルの苦難の時に再びこの世に来てイスラエルを救ってくれる、という信仰が強くありました。マラキ書の最後4:5-6節に書かれています。「5 見よ。わたしは、 主の大いなる恐ろしい日が来る前に、 預言者エリヤをあなたがたに遣わす。6 彼は、父の心を子に向けさせ、 子の心をその父に向けさせる。 それは、わたしが来て、 のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ」とあり、エリアの再来が述べられています。従って、13節の「人の子のような方」とは「預言者エリアの姿のような者」と解釈できます。第二列王記にエリアについての表現があります。1:8では「毛皮を着て、腰に皮帯を締めた人」と言われており、2:11では「火の戦車と火の馬が現れ、竜巻に乗って天に上って行った」とされています。BC2cの初め、即ち、エピファネスが出てくる少し前に書かれた文書に「ベン・シラの知恵」という文書があり、そこにはエリアの再来のことが書かれています。「火のごとき預言者エリア」という表現がされています。この「火」との結びつきは、先程「年を経た方」の由来としてあげたエゼキエル書1:26の「人間の姿に似たもの」における描写と共通しています。このエゼキエル書の表現は「年を経た方」と「人の子のような方」の両方に反映しているのです。

　旧約における「人の子」はエゼキエル書の場合もそれ以外の場合も具体的なこの世での人間のことであって、神様に関連した方のことを指す言葉ではありません。しかし、ここでの表現は「人の子のような方」ということであり、「人の子」そのものではありません。エゼキエル書1:26の場合も「人間の姿に似たもの」であって、「人間」そのものではありません。13節をみるとこの「人の子のような方」が「天の雲に乗って来られ」と言われています。直訳では「天の雲と共に」ですが、旧約に於いて「雲」を伴っているのは神様が現れる時のことです。所謂「神顕現」のときです。一例をあげます。詩篇68章4節です。「4 神に向かって歌い、御名をほめ歌え。 雲に乗って来られる方のために道を備えよ。 その御名は、主。その御前で、こおどりして喜べ」とあります。神様を指していることは明白です。すると「人の子のような方」は「預言者エリアの姿のような者」であり、「主なる神」を指していることになります。すると、「年を経た方」と「人の子のような方」の両方とも神様のことということになります。イスラエルの信仰では神様は唯一の存在であることは当然のことですから、この二者とも神様を指している、ということは、この二者は神様の表裏であると解釈するしかありません。イスラエルの伝統では、父と子は同一の本質存在と理解されていましたから、これは父なる神と子である「人の子のような方」である、と言うことも出来ます。旧約には「イスラエルの子」という表現も多数出てきますが、これは「イスラエル」と名付けられたヤコブの子であり、ヤコブの系譜に連なる者達のことです。それと同様に、「人の子のような方」とは主なる神である「年を経た方」の子であり、「神の子」のことである、ということになります。

　「この人の子のような方」という表現は新約聖書における黙示録に繋がっています。黙示録1:7でイエス・キリストの再来を表現し「見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン」と言われています。ここで「雲に乗って」がでてきます。そして13節に「人の子のような方」がでてきます。13-16をお読みします。「13 それらの燭台の真ん中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。14 その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。15 その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。16 また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった」とあります。これらの描写は、ダニエル書における「年を経た方」の描写と「人の子のような方」の描写をまとめたものです。黙示録14:14にもう一度「人の子のような方」という表現がでてきます。「また、私は見た。見よ。白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた」とあります。ここでは審判者としての主イエスが記されています。

　旧約における「人の子」はエゼキエル書によって黙示的存在とされ、ダニエル書において「人の子のような方」という表現で、「神の子」を指すことばとなり、黙示録において、再来のイエス様を指す言葉となっている、と理解できます。

「人の子」という言葉そのものはダニエル書の後、第一エノク書という黙示文書の一つに多数出てきます。ここでは黙示的預言として「主の民」の意味で使用されており、イエス様が使用された意味での「神の子」ではありません。むしろイエス様の使用された「人の子」の表現は、ダニエル書の「人の子のような方」を「人の子」として表現している、と理解できます。イエス様以前にこのように「人の子」を使用している例は見いだされません。黙示録は、それを「人の子のような方」としてダニエル書の表現を再び用い、主イエスの再来の時、即ち終末の時の表現としているのです。

ここまでで明らかになったことはダニエル書の今日の箇所は、黙示録が描き出している終末の時の事を、エピファネス・シリアの迫害に逢ったイスラエルの民の救いの希望として指し示している、と理解することができます。新約の下では「年と経た方」とは父なる神であり、「人の子のような方」は子なる神、イエス・キリストです。ダニエル書で述べられた終末の時が黙示録にて主イエスの十字架と復活の後、主の再来の時に関する叙述として再度述べられている、と解釈できます。裁きの時でもあり、神の国の完成の時でもある、終末の思想はエゼキエル書の時代から始まり、数千年の歴史を経て、我々の希望として、綿々と生き続けているのです。祈ります。（ご在天の父なる御神様、今日は、終末に希望を掛ける私たちの信仰をもう一度呼び覚まして下さりありがとうございます。主イエスの再来を望む信仰を生きたものとさせてください。私たちが主イエスの僕として、神の国の民として証を立てていけるよう、知恵と力と勇気をお与えください。我らの救い主、イエス・キリストのみ名によって祈ります）。